

エクセロの『選択』

大村伸一

去年の秋に、日本に住む友人のNから、本を買って送ってくれという連絡があった。マドリッドから300 Kmほどの場所にある、グラニコ村で私家版の古本市が立つから、そこで二三、指定の本を買えというのだ。

偶然、その日はその村の近くで仕事があったので、私は快くその依頼を承諾した。勿論、彼は私の予定を見越していたのだろう。

村には昼前に着いた。想像したとおりあまりお客もおらず、閑散とした市だった。Nから指示されていた本はすぐにみつき、その本を小脇に抱えて私は、市の中を何かを求めるでもなくうろついていた。幾つか面白そうな本もあったが、その中で一際目をひいたのが、エクセロ (Ekserot N.Omuda) という作者の『選択』という本だった。

私家版の書籍としてはさほど立派な装丁ではなかったが、なにより奇異に映ったのは、その表題が日本語で書かれていたことだ。他の書籍のほとんどがスペイン語であり、外国語の本もあるにはあったがすべてヨーロッパの文字アルファベットで書かれているその中で、この一冊だけが何故か日本語で書かれていたのだ。

私はさっそくその本を手に取り、ページをばらばらとめくってみた。ほぼ1500ページ程もある分厚い本は、5、6ページに渡る序文を除けば全文日本語であった。何か不思議な思いを抱き、私はとりあえずその本を買った。もう仕事に出発しなくてはならない時間だったのだ。

夜、その本を手にとり読み始めると、私はそこに書かれている奇妙な話に夢中になった。大部の本を読み終えたときは、窓が明るくなっていた。そして、この本を日本の友人達にも必ず紹介しなくてはならないと決意した。

この本の序文で、エクセロは、この奇妙な本の成り立ちを次のように説明している。

「言葉には4つの相があります。つまり、思考の言葉。話す言葉。記録された言葉。文字となった言葉。思考の言葉はただ自分のためだけに存在し、その意味も自分の中でだけ完結しています。話す言葉は聞く言葉でもあるのですが、これは、同じ時間同じ場所に存在する者の中で共有される意味を伝えます。電話は話す言葉を遠い場所にも伝えることができ、テープレコーダーは、話す言葉を異なる時間に伝えることができますが、このようにアナログなメディアによって記録され復元された言葉は、個人的なものであるという意味においては意味を伝えることができるのですが、話す言葉のような向心力には欠けています。そして、文字となった言葉。これは、同じ「言葉」という言葉によって表現されているにもかかわらず、まったく意味を伝える機能に欠けているのです。

意味というものは、言葉が伝達されるメディアによる表現とそれを記録したその時の文脈によって定められます。そして、その同じ意味が解釈されるためには、同じメディアの記録と、同じ文脈が必要です。「話す言葉」であればその条件がある程度満足されますが「記録された言葉」ではやや不十分です。そして、「文字となった言葉」では、この同じ文脈を保証することはまったく不可能なのです。そういう意味において、「文字となった言葉」は、読み手に書き手の意味を伝えることができません。

私は、文学的な作品、あるいはより広く、文字となった言葉の多くが、この事実を忘れ、書き手も読み手もこのことを忘れ、そのために、多くの悲劇が起こってきたことを思い出します。確かに、その解釈の多様性、といっても実は、解釈の不可能性であり誤解性とでも呼ぶべきなのでしょうが、それを逆手に取った文学作品というものの価値や面白さを私もまた理解しています。しかし、では、逆に、書き手の意味を正確に誤りなく完全に読者に伝えるような文学作品というものは不可能なのでしょうか。

この私の小説『選択』は、まさにそのような意図によって書かれたものです。

私の最初のアイデアは、理科系の教科書であるとか専門書の序文に書かれている、あの僭越で高慢な「この本を読むために必要な知識」であるとか「この本の対象としている読者」という考え方でした。勿論、本にそう書いてあるからといって、その条件を満たす読者だけが、その本を読むとは限りません。何も知らない中学生が傲慢にも高等数学や量子力学の理論書を読もうとするかもしれません。だが、ご安心ください。勿論、子供たちにそれを理解することはできないのです。何故なら、専門書の場合、必要としている知識は、それを理解するために必要な知識であり、それなくしてはその書物のハートである数式を理解することはできず、かくして、その数式をめぐる様々な議論がまったくの意味不明な繰り言としか理解でき

ないからなのであります。

では、この手法を文学的な作品に適用したらどうなるでしょうか。この作品は高校程度の日本語の読解力と、コナン・ドイル作「赤毛同盟」が既知であることを前提とする。などと言った「青毛同盟」を発表したとしても、それが日本語で書かれている以上、中学生が挑戦しようとするのを止められませんし、ポアロなら読んだんだがというホームズを知らない読者が読もうとするとき、その目の前に出向いて本のページを閉じることもできないのです。

本当にできないのでしょうか。

私の挑戦はこの間から始まりました。読者を選ぶ小説というものが書けないものだろうか。基準を満たさない読者はどうしても読むことのできない、そういう小説が書けないものだろうかと、私は30年に渡って研究を続けました。

様々な言葉の組み合わせや、言語の掛け合わせ、複雑な呼吸法、失われたと言われる古代の文字の探求、さらには禅やヨガ、魔術、チベットでの12年間の修行など、あらゆる試みを行った後で、結局それが意外と簡単にできることに私は気づいたのです。

『選択』は読者を選ぶ小説です。どういう条件が必要なのかはあえて書き記すにもおおよびません。条件を満たさない者にとっては、この小説は無意味ですし、もしかすると部分的に条件を満たす者であれば、部分的に理解できることはあるかもしれませんが、全体を読み理解するには、すべての条件が満たされなくてはならないのです。

読者のみなさんが、十分に楽しまれることを望みます」

どうも私は、この読者の基準を完全に満たしていたのに違いない。作者の生い立ちを見ると、日系三世のスペイン人であり二度の戦争に従軍し、家族はすべて失っている。偶然の一致か、私もまた同じ境遇であり、さらにその著者近影を見れば、どこかしら私自身の面影をそこに見出すこともできた。たぶんこれがこの本が要求する読者の条件の大きな部分であったのはまず間違いのないことだろう。

さて、以下、ご紹介するのは、この『選択』の150行程度の要約である。

本来1500ページの大作であるが、通信で読む場合の便宜を考慮して、また、読者の条件を満たさない人々を煩わせることのないように、このような方法を取った。原作そのものをど

うしても読みたいという方は私のほうまでメールをいただければ、近く予定している復刻版の出版時、必ずご連絡を差し上げることをお約束しよう。

『選択』
